市史だより

がちまやぁ
Gači-majaa

第30号・2014年7月31日(木)発行

年2回（7・12月発行）

編集・宜野湾市教育委員会 文化課 市史編集係
〒901-2224
沖縄県宜野湾市真志喜1-25-1

問い合わせ・情報提供先
☎ (098)870－9317
Fax (098)870－9316
E-Mail:Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp
※宜野湾市役所のホームページで、バックナンバーも公開中!!!
HP:http://www.city.ginowan.okinawa.jp

真志喜ってどんなところ？

真志喜は西海岸に面しており、北東側は大山、南から南西側にかけては宇地泊と大謝名に隣接している集落です。

戦前は農業が中心で、さとうきび、さつまいも、水芋などが主な主要作物でした。さとうきびは、集落内の製糖小屋（サーターヤー）で黒糖に加工していました。真志喜は教育には非常に熱心で、田畑を売ってでも子弟に教育を受けさせるといった風潮がありました。そのため、「スグリ部落」（優れている部落）と呼ばれ、歴代間切長、村長等の人材を輩出した村でもあります。

集落の東側に「はごろも伝説」で知られる、森（ムイヌ）の川（カーヌ）の泉（イズミ）があります。その奥の森林はウガンヌカタと呼ばれ、聖なる場所でありました。かつては真志喜の神に仕える女子を除き、一般人の立ち入りは禁止され、草木一本も切ることを許されませんでした。

1945 年 4 月の沖縄戦により、真志喜も大きな被害を受けました。捕虜となった人々は、中部の収容所に分散収容された後、1955 年に真志喜への移住が許されました。しかし、その土地には米軍基地施設「キャンプマーシー」があり、元の土地に戻れない住民もいました。その後「キャンプマーシー」は、1961 年から 1976 年までの間に 3 回に分けて全面返還されました。

現在の真志喜は埋立地に沖縄コンベンションセンター、宜野湾港マリーナ、市営球場が建設され、大きく発展を遂げています。

第 2 次世界大戦直後の真志喜地区
（ぎのわんの西海岸より）

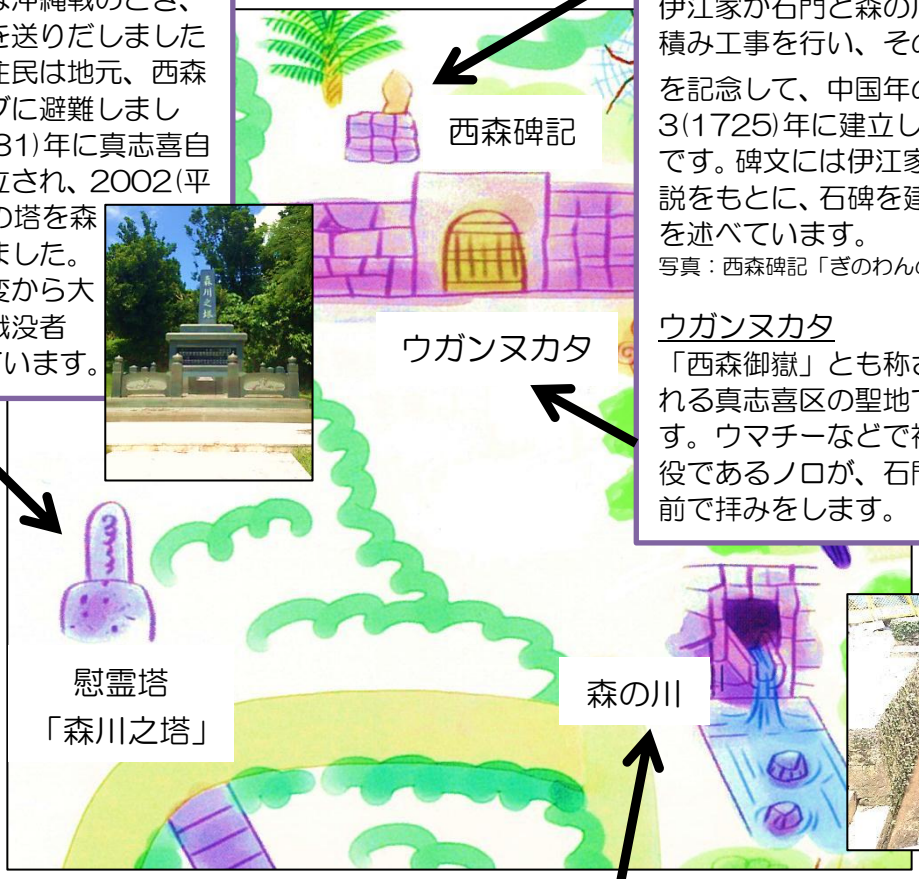
次のページから、さらに詳しく真志喜についてみていきましょう

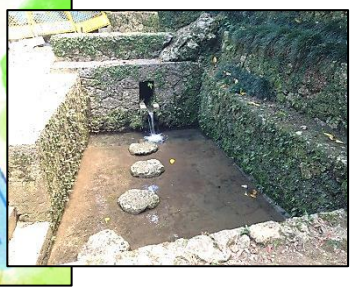
市民の方々が、森林浴や散歩、ランニングなどで楽しむ真志喜区「森川公園」には、真志喜の歴史が感じられるものがいくつかあります。そこで、森の川の歴史を見ていきましょう。

森川之塔
真志喜区の住民は沖縄戦のとき、宮崎に学童疎開を送りだしましたが、ほとんどの住民は地元、西森にあるマヤーアブに避難しました。1956(昭和31)年に真志喜自治会によって建立され、2002(平成14)年に慰霊の塔を森川公園に移設しました。塔には、支那事変から大東亜戦争までの戦没者78名が祀られています。

西森碑記
察度王にゆかりのある士族伊江家が石門と森の川の石積み工事を行い、その完成を記念して、中国年の雍正(ようせい)3(1725)年に建立したものです。碑文には伊江家の先祖の伝説をもとに、石碑を建立したことを述べています。
写真：西森碑記「ぎのわんの文化財」より

ウガンヌカタ
「西森御嶽」とも称される真志喜区の聖地です。ウマチーなどで神役であるノロが、石門前で拝みをします。





森川公園には、「はごろも伝説」から始まり、中山王察度にゆかりのある土地の森の川を中心とした、琉球王国時代よりも前からの歴史が学べる場所となっています。そして、沖縄戦のとき住民の避難場所となった自然洞穴のマヤーアブもあります。

沖縄には他にも歴史を学べ、感じる場所がたくさんあるので、この機会に沖縄の、琉球の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。

森の川
地域の人々にとっては生活に使う泉として重要な場所でした。そんな森の川には、有名な伝説があります。それは「はごろも伝説」です。

はごろも伝説
昔、奥間大親という人がいました。ある日、奥間大親は森の川で沐浴中の天女をみつけてその飛衣を隠し、天に帰ることができなくなった天女を家にかくまいました。そのうち二人は夫婦になり、一男一女を儲けましたが、ある日天女は、女子の歌で、飛衣が高倉の中に隠してあることを知り、飛衣をまとい昇天しました。

真志喜の綱引き

戦前、宜野湾の多くの村で、地区ごとに綱引きがありました。そのほとんどが 6 月ウマチー(稲の収穫を祝う豊年祭)や 6 月カシチー(稲の予祝儀礼)前後を定日としていました。当時は真志喜でも稲作が行われていたので、各戸からワラを数束出してもらい、自前のワラで綱を打ったようです。綱引きの目的は地区の繁栄と豊作祈願でした。また、戦前までは綱引きの日の翌日、闘牛大会を催していたそうです。

終戦後、真志喜の人々は 1947(昭和 22)年に野嵩の収容所から移動し、大山へ一時、寄留しました。その年から綱引きを再開したようです。

1982(昭和 57)年の調査によると真志喜の人々は、「綱引きは祈願行事であるため、絶やしてはいけない」との思いから、茅を集めて大人たちが綱を作り、子供たちが綱を引くという子ども綱のかたちから始まりました。1955(昭和 30)年になって真志喜に戻ることが許されると、翌年の1956(昭和 31)年には本格的に綱引き行事を復活させました。1957(昭和 32)年からは予算を組んで、稲ワラをよそから購入して綱を作るようになった他、旗頭や鳴り物などの綱引きに係る道具類も、このときに揃えたそうです。

現在、真志喜の綱引きはコンベンション通りで旧暦 6 月 15 日に近い週末に行われています。年代・場所の変遷と共に、内容は変化し、現在はマーチングバンドの演奏、ましき子ども会のエイサー、老人会の踊り等のプログラムがあります。次に集落を二つに分け、まず旗頭の「ガーエー」で対抗意識を盛り上げ、続いて「アギエー」(上写真：高く掲げた綱を、ぶつけ合い、先に崩れ落ちた方が負けとなる勝負）その後、「綱引き」が 2 回行われます。2 回戦目は相手側と位置を入れ替わっての勝負です。真志喜の住民でなくても誰もが自由に綱を引くことができます。最後は参加者一同、楽しくカチャーシーを踊ります。綱引き行事を大切に伝承してきた私たちの祖先や真志喜の方々に感謝しながら、今度はあなたも綱を引いてみませんか？

尚、宜野湾市立博物館のロビーには、綱引きがパイプライン通りで行われていた当時の真志喜の旗頭が展示されています。博物館へお越しの際は、どうぞご覧ください。

市史編集係　事業報告

2014 年度沖縄県地域史協議会　総会に行ってきました

2014(平成 26)年 6 月 6 日の金曜日に、2014 年度沖縄県地域史協議会が南城市中央公民館で行われました。

最初に巡見があり、南城市の歴史が感じられる遺跡等を、２時間ほどで体感しました。

回った場所は、尚布里の墓、アカンミの殿、上江洲の殿、當山の石獅子、赤嶺ガー等です。

特に印象に残ったのは當山の石獅子で、全４体のうちの３体を見ることができました。

次に総会があり、講演会と報告がありました。

他の市史と交流を持つことができ、大変勉強になった一日でした。

狭い路地もなんのその★

少しユニークな石獅子でした

歴史公文書等整理・活用事業について

戦後間もない頃から村役所・市役所で作成された公文書を整理・保管・活用するため、平成 24 年度から本事業がスタートしました。昨年にもご紹介いたしましたが、現在は引き続き公文書の目録化および整理作業を重点的に行っております。

平成 26 年度は、今後公開することを前提として、多くの市民・研究者の方々などへ、広く活用していただけける